現代英詩散策

ホプキンズからラーキンまで

長 江 芳 夫

南雲堂

著者について

長江 芳夫 (ながえ よしお)

昭和五年 (1930年) 愛知県生れ。昭和二十八年 (1953年) 名古屋大学文学部卒業。現在,相山女学園大学短期大学部教授。著書に『詩と散文—チャールズ・ラムからディラン・トマスまで』(朝日出版社,昭和五十年) がある。

現代英詩散策——ホプキンズからラーキンまで 〈検印省略〉

1991年5月30日 1刷 定価3300円 (本体3204円)

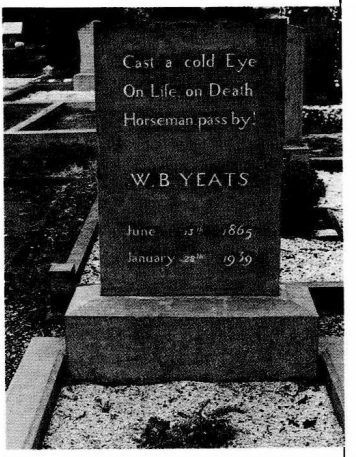
著者 長江芳夫
発行者 及川毅
印刷所 ㈱海川企画

発行所 株式会社 南雲堂
東京都新宿区山吹町 361/郵便番号 162
振替口座・東京6-46863番
電話 (編集部) 03 (3268) 2387
(営業部) 03 (3268) 2384
ファクシミリ 03 (3260) 5425

© 1991 Yoshio Nagae *Printed in Japan* 〈1B-197〉

ISBN4-523-29197-7 C3098

◀ Ben Bulben



Yeats's grave ▶

◀ 冬の勝持寺

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

目　次

I. G. M. ホプキンズ
「鉛のこだまと金のこだま」 …… 7

II. W. B. イェイツ
1.「ビザンティウム」 …… 28
2.「瑠璃」 …… 48

III. T. S. エリオット
「灰の水曜日 VI」 …… 69

IV. ハート・クレイン
「壊れた塔」 …… 85

V. W. H. オーデン
1.「子守唄」 …… 96
2.「石灰岩を讃えて」 ……106
3.「クレイオー讃歌」 ……115
4.「流れ」,「終禱」,「早暁祈禱」 ……132

VI. セオドー・レトキ
「暗い時に」 ……156

VII. ディラン・トマス
1.「サー・ジョンの丘の上で」 ……168
2.「彼の誕生日の詩」 ……190

VIII. フィリップ・ラーキン
「社交詩」 ……210

註 ……243

あとがき ……249

現代英詩散策

ホプキンズからラーキンまで

～I～

G. M. ホプキンズ
「鉛のこだまと金のこだま」

G. M. Hopkins (1844–1889) の詩の言葉には Ζωή(ゾーエー)(生命——ヨハネ伝 1–4) があった。言葉は神の姿そのもののように，冷たいきびしさと暖かなやさしさを底深く秘めて，Hopkins の体に乗り移り，その心に取り憑(つ)いた。星月夜の光の饗宴に，鱒の背のまだらの点彩に，また青くわびしい残り火に——自然の示す最も微かな身振りにも，彼は inscape を見いだし，その背後に広大無辺の神の意志を認めた。

「音楽では旋律，メロディーが，そして絵画では意匠が，いちばん私の心を打つものですが，詩で私が何よりも目ざすものは，design, pattern, すなわち私が inscape と呼びならわしているものです。この design なり，pattern なり，inscape なりの長所は特色がある (distinctive) ということであり，特殊性の短所は奇矯になることなのです。」[1]

Inscape は，また species (形相(けいそう)) (〈Eucharist 用のパンとぶどう酒

の目に見える形色(けいしょく) であり，「様式の個別に特殊な美しさ」(individually distinctive beauty of style)[2] でもある。Scape は -ship, shape と語源を共にし，OE scieppan (=to form, make, shape) から来る。神 (God) は，古代英語では，Scieppend (=Shaper) であった。ラテン語の species は specere (=to see) の派生語であって，ギリシア語の εἶδος (エイドス) (=that which is seen, the form, the shape) に等しい。その εἶδος は εἴδω (エイドー) (=to see) の派生語である。それは「見る」ことと切っても切れない密接な関係にある。そして εἶδος (形相, form) は ὕλη (ヒュレー) (質料, matter) に対する。すなわち，inscape は内なるものの表現としての形式と考えられる。その形式は「見られたものの姿」であり，Hopkins にあっては，心眼に捕えられた，ものの本然の姿 (Duns Scotus の haecceitas) であった。

"Poetry and Verse" のなかでも Hopkins は，「ある内容や意味 (matter and meaning) は詩にとって大切なものであるが，それはただ，それ自身のために意図される形 (shape) を支え用いるために必要な要素としてにすぎない」と言う。彼の詩は先ず第一に美的彫琢としての言葉の形，style を生命とする。歴史や社会や思想などの資料は，むしろ眼や耳に愬える形の影でさえある。意味，内容が形式を決定するというよりは，逆に形式が素材を規定するといった趣さえもっている。少なくとも内容とくらべて表現形式のほうが二次的だということにはならない。詩作にとりかかったときには，詩人の認識の眼に，詩の輪廓は見えていなければならない。その形は詩作の終るのとともに一個の作品として完成する。

Hopkins にとって生命であった，言葉としての形色 (inscape) は

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

また，眼のはたらきに劣らず耳のはたらきを重んじることと大いに関係がある。Inscape の母であり，その第一特質であり，原動力でもある instress は，ほとんど常に何らかの色彩と音色をともなった image となって造形された。

「息をついて，耳で読んでいただきたい。私はいつもそのように読んでもらいたいのです。そうすれば私の詩は，ちゃんとしたものになります。」[3]

内にたぎる力は，言葉となってあふれ出るとき，心の耳，心の眼にうったえる形をとる。それは「高められた現代語」(the current language heightened)[4] であり，「話し言葉の自然のリズムで，散文のリズムに最も近い」[5] sprung rhythm で書かれた。そのようなものが彼の言葉であった。泉のように湧き上る詩想は，興奮の昂揚のうちに，自らにいちばん適した言葉を探し求め，ついにあたかも天啓によるもののように，それを探しあてるのであろう。しかしそこには詩人と言葉との互いに仮借しない組み打ち，さらには言葉と言葉との火花を散らした葛藤が介在する。彼は文法の規則の枠組をはみ出すような造語法を試み，奇矯と思われるような言葉づかいも避けなかった。こうして単語は音符の役をひきうけ，できあがった詩は，さながら一つの結晶としての完璧な楽曲となった。楽想は時には感興の流れに乗って現れ，言葉の波となって彼を体ぐるみさらったが，多くは言葉の側からの復讐に傷つき，無理な操作を敢えてしたのちに得られるものであった。そこには，一つ一つの言葉が現実

の諸相に体当りをして流した汗と血の痕跡が読みとれるであろう。そんなときのいちばんの働きは音楽的想像力の飛翔力であった。その結果は，飛躍したimageや，あいまいな表現ともなり，一種の凝った気取り (preciosity, mannerism) を伴った。それは，耳におよぼす言葉の効果に細心で意識的な詩人にとっては，むしろ自然な形式というべきものであった。

"The Leaden Echo and the Golden Echo" (1882) は，特にこの点で，作者自身にとっても気に入った作品であったらしく，R. W. Dixon に「私はこんなに音楽的な仕事をしたことはありません」[6] と書き送ったほどである。この詩はもともと "St. Winefred's Well" という，七世紀の Wales の伝説にもとづく詩劇のなかで乙女らの歌うものとして意図されたのであった。Sprung rhythm に乗り，refrain を織り込んで，反響効果の大きいホールで歌われると，交響詩風な音楽構想が明瞭によみがえるであろう。女性のコーラスであっても，その調べは強く激しいもので，英語が本来もっている男性的な特質は，Anglo-Saxon系の簡勁な単音節語の配列においても示されている。

まず，The Leaden Echo においては，この世の美の移ろい易さ，はかなさを歌い，早く絶望におもむくのが知恵なのだと説く。その諦観と虚無感は，旧約伝道の書の "Vanitas vanitatum, et omnia vanitas" を想い合わさせる。詩は冒頭から硬くひきしまった語調を帯びて，疑問詞で始まる。

How to kéep—is there ány any, is there none such, nowhere

known some, bow or brooch or braid or brace, láce, latch or catch or key to keep

Back beauty, keep it, beauty, beauty, beauty, . . . from vanishing away?

どうして留めよう——何かあるのか，ないのか，どこにも分っているものはないのか，蝶結びかブローチか組紐か締金か，締紐か，掛金か留金か鍵か

美を留め，それを，美を，美を，美を，消え去らぬように留めておく手だてはないのか？

いったん How to kéep と始められた文章が，一瞬の吐息とためらいのあとで，あたかも思い直したかのように，一転して再び is there ány any, と通常の疑問文の形で，口ごもりつつひきつがれる。しかしその強勢のある肯定の any は直ちに否定の形となり，is there none such, nowhere known some, と問い直される。Hopkins の詩の特色の一つである，同一あるいは類似の音声をもった語の多用は，第1行の半ばにしてすでに明らかである。is there, is there, ány, any, none such, nowhere known some. 更に bow or brooch or braid or brace, láce, latch or catch or key to keep と，類似音を鎖の環のように次から次へ連続して引き出す。それは言葉の襲撃である。(bou—broutʃ—breis—lætʃ—kætʃ—ki:—ki:p) 一斉射撃である。その手際は手品師のごとく鮮やかで，読者は言葉の錬金術師の手さばきに我を忘れて引き込まれる。

Alliteration と assonance の巧みな使用と変様は詩人の独擅場である。そして，それらの言葉同士は，互いに触発し交響しあって，音楽的な余韻をひびかせる。この詩の題そのものが二つの「こだま」であって，The Leaden Echo と The Golden Echo との反響が，たえず乙女らの合唱の書割的風景になっている上に，入念に選ばれた単語の一つ一つが，心理的効果として，いわば秋の野にすだく虫たちの声にも似て，読者(あるいは聴者)の心のひだに入り込むのである。細部の緻密な心配りは全体の美的構成と調和して，(殊に音楽的には) 間然するところがない。

2行目の最初に Back という，短い古英語起源の言葉を置いたのは，押韻の関係以外に，4行目の Down と同じように，動詞 (keep, frowning) の伝達する力を補強して，「身体的な圧迫感」[7] を与えるためでもある。そして beauty, keep it, と念を押しながら，さらに beauty, beauty, beauty, . . . と三度も繰り返されるのは，美の魔法に囚われの身になっている者の愛惜の悲痛な叫びである。このあたりの鉛の声には，「時の大車輪の輻に自分の甲斐なき指をかけようとする」(lay my ineffectual finger upon the spoke of the great wheel) ("New Year's Eve") Lamb の epicureanism にも一脈通じるものさえ感じられる。この beauty, beauty, beauty, . . . は，刻一刻去り行きつつある非情の時の彼方にある老の影，および死の足音と表裏一体をなすものであり，The Leaden Echo の結語としての Despair, despair, despair, despair. と対照をなすものである。地上にあっては美の凋落を阻止すべき手立ては何一つとしてない故にこそ，むしろ絶望の速やかに至ることが至福への道なのである。

Ó is there no frowning of these wrinkles, rankèd wrinkles deep,
Dówn? no waving off of these most mournful messengers, still
messengers, sad and stealing messengers of grey?——

おお，この皺，深深と並んだ皺をこわい顔をして退けることはできないのか？
この悲痛な使者，沈黙の使者，悲しく忍びよる灰色の使者を追払うことはできないのか？——

O とか，Oh という感投詞も Hopkins の詩の一つの特徴であり，原初的体験と詩的感動の表現である。動名詞 (それも Anglo-Saxon 起源の動詞が多い) の頻出も，動的で劇的な要素を増すのに力を貸している。しかも rankèd wrinkles にしても，sad and stealing messengers にしても，的確な比喩と精細具体的な名詞による描写で，印象はますます強烈である。

No there's none, there's none, O no there's none,
Nor can you long be, what you now are, called fair,

できない，できない，おおできないのだ，
またそなたは，今のそなたのように，美しいと呼ばれることも長くはない，

しかしながら，答は冷然と否定を繰り返すのみである。それゆえに (And) 絶望のみが残された唯一の道である。

Do what you may do, what, do what you may,
And wisdom is early to despair:

そなたが何をしようとも，何を，何をしようとも，
だから早く絶望することこそが知恵なのだ。

この And の一語にこめられた決断にも並並ならぬ力がある。それは鉛のこだまの結論に他ならないからである。

Be beginning; since, no, nothing can be done
To keep at bay
Age and age's evils, hoar hair,
Ruck and wrinkle, drooping, dying, death's worst, winding
sheets, tombs and worms and tumbling to decay;

始めるがよい，そんなことはできない相談なのだから
老いと老いの災禍を，白髪，
皺と襞，老衰，臨終，死の最悪，経帷子（きょうかたびら），墓と蛆虫と腐朽への転落を
食い止めるなどということは。

Age 以下いずれも人間の老と死に伴う，あまりにも具象的な image ばかりが並べられる。それらは次から次へと，こだまの波となって，ざぶんざぶんと読者の心のなぎさにも押し寄せる。それらの目的語の Whitman 風の長い行列に比べて，他動詞をひきうける

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.